

地元米で夢の卵

相馬 逆風に挑む菊地さん夫妻

放し飼いにされたニワトリにエサを与える長男松陰ちゃんを見つめる菊地さん夫妻。相馬市大坪で。



震災から11日で4年半。風評被害による農業への逆風がいまだに続く福島で、周囲の反対を押し切り養鶏に飛び込んだ若い夫婦がいる。相馬市大坪の菊地将兵さん(29)と陽子さん(30)。エサ作りから飼育環境まで徹底した自然農法にこだわり、収入は不安定だ。それでも「全国に古里を発信する特産品に」と夢を追う2人の意思は固い。

【大塚卓也】

周囲の反対押し切り

ぬかるむ田んぼのあぜ道を下り、ビニールハウスの戸を開けると、地面を覆うもみ殻の上を11羽のニワトリが歩き回っていた。

「4月にヒヨコから育て始め、8月にはやっと卵を産んだんです。今日は10個。まだ量が安定しなくて」。身おもの陽子さんが腰をかかめて産卵箱をのぞき込んだ。長男の松陰ちゃん(2)が小さなバケツを傾げると、トリが一斉にエサの受け皿に群がってきた。

「4月にヒヨコから育て始め、8月にはやっと卵を産んだんです。今日は10個。まだ量が安定しなくて」。身おもの陽子さんが腰をかかめて産卵箱をのぞき込んだ。長男の松陰ちゃん(2)が小さなバケツを傾げると、トリが一斉にエサの受け皿に群がってきた。

「朝、『エサやりに行くか』って聞くと、喜んでついてくるんですよ」。トリを指さす松陰ちゃんを将兵さんが抱き上げた。「仕事に打ち込む親を子どもが側で見て、自然と覚えていく。昔の農家では当たり前でしたよね」。幼少期に両親と離散し、兼業農家の祖父母に育てられたという将兵さん。ずっと抱いてきた「理想の家族」の姿が、目の前にある。

「大産生の大手業者が使う飼料はカロリーが高過ぎ、健康にいいはずがない。液状のフンはトリアが下痢をしている表れ」と将兵さんは言う。暑さで元気がないトリには、自分で育てたスイカを食べさせた。病気を防ぐ抗生物質も一切使う必要がないという。

将兵さんが野菜の無農薬栽培を始めるために古里に戻ったのは2011年5月だった。東京でホテルマンをしながら資金をため始めたときに起きた3月の大震災と原発事故。故郷「小さい頃遊んだ田んぼと畑が消えてしま

う」という焦りと「4年近く全国の農家に住み込みで有機農法を見学してきた自分なら立て直せる」という漠然とした思いに駆り立てられた。

「朝、『エサやりに行くか』って聞くと、喜んでついてくるんですよ」。トリを指さす松陰ちゃんを将兵さんが抱き上げた。「仕事に打ち込む親を子どもが側で見て、自然と覚えていく。昔の農家では当たり前でしたよね」。幼少期に両親と離散し、兼業農家の祖父母に育てられたという将兵さん。ずっと抱いてきた「理想の家族」の姿が、目の前にある。

エサは地元の農家から買った玄米や、煮込んだ魚のアラを乾燥させて混ぜた特製だ。使うコメは1日7キ。毎日コメも食べさせ、乳

「ママと子どもに安心して食べさせられる肉と卵を自分で作りたい」と今年春から始めた養鶏は、ようやく来月出荷で

「ママと子どもに安心して食べさせられる肉と卵を自分で作りたい」と今年春から始めた養鶏は、ようやく来月出荷で

「ママと子どもに安心して食べさせられる肉と卵を自分で作りたい」と今年春から始めた養鶏は、ようやく来月出荷で

震災4年半

どうぼくの今

「ママと子どもに安心して食べさせられる肉と卵を自分で作りたい」と今年春から始めた養鶏は、ようやく来月出荷で

「ママと子どもに安心して食べさせられる肉と卵を自分で作りたい」と今年春から始めた養鶏は、ようやく来月出荷で